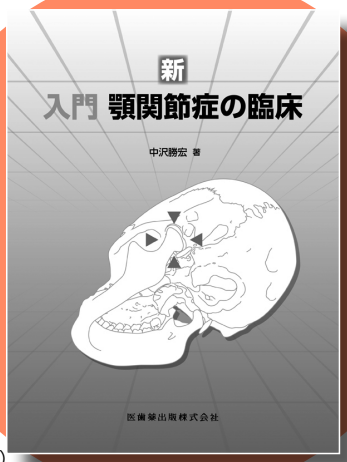
Book Review

新 入門 顎関節症の臨床



中沢勝宏　著

A4 判変，216 頁
オールカラー
定価（本体 12,000 円+税）
医歯薬出版刊

Reviewer
井川雅子　Masako Ikawa
（静岡市立清水病院口腔外科
日本口腔顔面痛学会専門医・指導医，日本顎関節学会専門医）

50 年にわたり日本の顎関節症治療を牽引してきた著者が，最新の知見を自らの臨床例とともにまとめた本書を上梓された．著書多数の著者であるが，本書は顎関節症に関するすべての項目を網羅した「中沢顎関節症の集大成」ともいうべき書である．

本書の内容に触れる前に，まず最近の顎関節症を取り巻く背景について触れたい．2013～2014 年は，顎関節症専門医にとって激動の時期であった．2013 年には，日本顎関節学会が，長らく用いられてきた顎関節症の概念と分類を改訂した．また，顎関節症の鑑別診断に重要な国際頭痛学会分類（ICHD：International Classification of Headache Disorders）が 10 年ぶりに改訂され，現在の ICHD-3 のひな形である ICHD-3β が発表された．さらに，本書でも重要視されている，Ⅱ軸（精神・心理・社会的要因）の評価の際に重要となる，米国精神医学会の精神疾患の診断と統計マニュアル（DSM-5：The Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders）が 13 年ぶりに改訂された．そして，2014 年には，国際 RDC/TMD コンソーシアムネットワークの研究者たちによってまとめられた国際標準の顎関節症の診断基準として DC/TMD（Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders）が発表された．ICHD と関連付けられた DC/TMD の出現は，Evidence Based に顎関節症治療を行おうとする者にとっては，新時代の到来と言っても過言ではない．

すなわち，現在の顎関節症は，医科的疾患の分類や枠組みのなかで顎関節症をとらえ，これに準じて診断と治療を決定する疾患であり，口腔外科出身の著者が従来より堅持してきた信念に一致する．

前述のように，顎関節症の研究は現在も日進月歩で進んでいる．一方で，チェアサイドでの診療で普遍かつ最も重要なのは，患者を Bio（器質的要因：Ⅰ軸）と psycho-social（Ⅱ軸）の 2 面から，複眼的に評価する必要があるということである．日常生活に支障をきたすほどの重症例は，通常の「顎関節症」ではなく，他疾患が併存していると考えるのが，現在の専門医の常識である．

本書はⅠ軸については，解剖，痛みの分類とメカニズム，特に中枢性疼痛について（痛み刺激の入力が長引くと脳の痛み回路の興奮が生じ，身体的な治療を行っても治癒しにくい），また顎機能と病的咬合についても詳細な解説がされている．各項目についての専門書を上梓されている著者だが，本書では要点を濃縮してまとめあげている．

一方，難治化の最大の原因はⅡ軸の併存であり，治療の泥沼化を避けるためには，Ⅱ軸の要因を診断・除外できる知識が必須である．解剖や顎機能に精通した著者であるが，実はⅡ軸は著者の最も得意とする分野である．第 5 章では精神疾患の解説が，第 10 章の「医療面接」では，初診時にこのような患者を見抜く方法を解説している．

顎関節症の概念は拡大し，知らなければならない知識も増えている．最近の顎関節症の考え方を知るためにも，コンパクトにすべてをまとめた本書はタイトル通り「入門書」として有益であることは間違いない．